

## 日記の下書き

高澤莉乃

雨傘を抱えて空調機械室の扉は雨水色の重力に満たされる。リサイクル方式の定期券は全ての生徒の怠惰と未知への友愛を引き取り、三三〇一教室に紛れ込んだエイリアンと交信している。その間に六月の分解を待つ人工物達は調理され、残されたレモンの香りは遠く、ある箱式石棺まで惨事を伝えたはずである。セハノールSSーーの霧を眠たげに塗り広げたくもりまなこの少年少女は沈黙の横を天使の白い石畳のみを選び取つて遠慮深く歩いていく。ただ一つを踏み外した少年、少女は窓を開けるには鋭すぎる爪で浮かぶ手に法則を取り戻し静謐と安全の保持は片足で守護される。彼女が彼女を着がえるとき夕陽よりも高い音で鍵の音は響きわたり、壁の展示は六世紀よりも数刻前の曇天に飾られるだろう。